

イナズマイレブン～時を超えた二人の道～

すばるやよ。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サッカーが大好きな少年、十六夜 悠貴（いぎよい ゆうき）と幼馴染の菜花黄名子が過去に飛びサッカーをする物語である。

ある日、悠貴がいつものように黄名子の家にサッカーをしようと誘いに行くと……。

目次

ぶろろーぐ	1
第一話	3

ぶろろーぐ

ピピピツピピピツピピツガチャ

悠貴「う、うーん……もう、朝かあ」

あ、おはようございます！十六夜 悠貴といます！きて、おきたことだし飯食ってサッカーやりますか!!

俺は今中学一年、好きなものはミックスジュースだ！好きな人は……ま、まあ置いておいて、今から俺は幼馴染の黄名子の家に行ってサッカーに誘うつもりだ。そうとなれば今から行きますかー!!

ま、幼馴染なんですぐ着くんだけどね。

悠貴「おはようー！黄名子いるー？」

シーン……………。

あれ？何もかえってこない寝てるのか……？でも、それにしては、あ、鍵空いてる

悠貴「お邪魔しまーす……」

???「お願いだ！俺に力を貸すと思って！」

???「いややんね！急に家に来て何いってるやんね！」

え、黄名子と誰かが言い争ってる？誰だ？聞いたことはない声だけど……。それより早く助けに出た方がいいよな！

悠貴「おい！あんた誰だよ！」

???「!?」

黄名子「悠貴！なんでいるやんね？」

黄名子さんは呑気なもので、ほんとこの子は呑気で可愛いところあるね。

???「もういい！こうなったら！お前も連れていく！」

悠貴「はあ？何言ってるんだ？」

黄名子「気をつけるやんねさつきから過去にいつてサッカーを守るんだ！って何回もいってるやんね。」

おー、それはそれは頭が悪いんですねわかります。どうやっても過去には行けないだろ（笑）。未来にも行けないけど。

まあ、それはいいとしてこいつはこじらせてるなああの病気を。

??? 「じゃあ、頼んだぞ！お前たちに未来がかかっている！かもしれない！」

マジでこいつ何言ってるの？あ、なんか取り出した。それを、俺たちに向かつて投げてきた……投げてきた!?

悠貴 「はあ!? こつちに投げんのかよ!?

黄名子 「あわわわ」

悠貴&黄名子 「うわああー!!」

あの野郎！次あったとき覚えてやがれ！

~~~~~

悠貴 「う、うーん。知らない天井だ。」

ごめん、言いたかっただけ。

悠貴 「とりあえずここは何処なんだ？」

家のなかではあるようだけど、まずはこの部屋から確認してみるか……。つて！ちよ、ま!黄名子が横に寝てるだ……と……。

黄名子 「……うみゆ……すー、すー」

悠貴 「かわええ。」

黄名子 「うん……悠貴？ここどこ？」

悠貴 「わからん。ただ、信じたくはないが、過去ってことじゃないか？」

黄名子 「なんでそんなことがわかるやんね？」

黄名子 「……。だってそりゃ……」

悠貴 「あのシンボルって雷門中じゃね？」

## 第一話

悠貴「あのシンボル雷門中じゃね？」

そうだ、俺たちの時代には雷門中は無いしな。こんなところにあるならまずあいつの言ってたように過去に来たって思うのが正解だろう。

黄名子「でも、あの人はなんでうち達をここに飛ばしたやんね？」

悠貴「そこなんだよな。まあ、達じゃなくて俺は巻き込まれたみたいなものだけだね。」

黄名子「むうー！そもそも勝手に家に入ってきたの悠貴の方やんね！」

悠貴「おう……。」

凄く正論がかえってきて黙るしかなかった。

でも、どうするかな。こんな右も左も分からないところで生きていけるのか？

そういえばあいつ、サッカーを救うだかなんだか言ってなかったか？よくわからんぞ？となるとなんだ、雷門中に入ればなにか起こるか？

黄名子「あ、こんなところに手紙があるやんね！」

悠貴「ん？どれどれ？」

《これを見ているということは無事に過去に着いたってことだな。この家は俺からのプレゼントだ。あと、お金はその封筒にはいつている。あと、雷門中に明日から転校と言うことにした。サッカーのことは頼んだ！》

なんか、すごいことに巻き込まれてる気がするよ。これからやっていけるのかな？ていうか黄名子と二人きりって……い、いや！別にやましいことは考えてないぞ！って誰に言ったんだ？

黄名子「これから、どうなるやんね？」

悠貴「俺もちよつと分からないな。でも、サッカーをすることは変わらないんじゃないか？」

黄名子「ハア、悠貴は本当にサッカー大好きやんね♪」

悠貴「おう！当たり前だろ！って言ってるけど黄名子も俺くらいにサッカー好きじゃんか（笑）」

まあ、とりあえず今日はもう夜だし寝て明日あそこの雷門中に行けばいいんだよ。もう結構疲れた寝よう。

悠貴「黄名子今日は寝るか。もう眠いから…。」

黄名子「そうやんね。うちも、もう眠いやんね」

悠貴「うん。おやすみ…。」

そうして俺は深い闇のなかに意識を沈めていった。

黄名子「た、助けて、ゆう…き。」

悠貴「!?ハアハアハア」

なんだ！今のは！黄名子は無事か！

黄名子「もう、きな粉餅は食べられないやんね」

よ、よかったー。何だったんだ、本当に。夢にしてはリアル感がありすぎだったし…。今は、考えるのはよしとくか。

そ、それより今日から雷門中に通うんだ。これからサッカー出来るなら俺は満足だ！そうと決まれば黄名子起こして学校行くか。普通に遅れてると思うし。

悠貴「黄名子、朝だぞ起きろよ」

黄名子「んー。あと、5分やんね」

悠貴「先に学校行くぞ？」

黄名子「起きるやんね！」

悠貴「そうやって最初から起きればいいんだよ。さあ、準備してとつととサッカーやりに行くぞ」

黄名子「おー！」

うおー！早くサッカーやりてえー！それで俺は試合やりたい！さてと、と言うわけで放課後ですね。え？いきなりすぎる？別にいいんじゃないでしょうか。俺の都合で良くない？

あ、ちなみに黄名子とは一緒のクラスだった。